平成15年度厚生労働科学研究
（子ども家庭総合研究事業）
報告書（第８／11）

030310 主任研究者　芝　野　松次郎
（児童福祉専門職の児童虐待対応に関する専門性向上のための
マルチメディア教育訓練教材および電子書式の開発的研究）

0030311 主任研究者　小　西　聖　子
（ＤＶ被害者における精神保健の実態と回復のための援助の研究）

0030314 主任研究者　網　野　武　博
（保育が子どもの発達に及ぼす影響に関する研究）

0030326 主任研究者　本　間　博　彰
（児童虐待に対する治療的介入と児童相談所のあり方に関する研究）

0030325 主任研究者　服　部　祥　子
（児童虐待発生要因の解明と児童虐待への地域における予防的支援方法の
開発に関する研究）

0030327 主任研究者　金　吉　晴
（母親とともに家庭内暴力被害を受けた子どもへの心理的支援のための調査）

厚生労働科学研究
（子ども家庭総合研究事業）

保育が子どもの発達に及ぼす影響に関する研究

平成15年度研究報告書

平成16年３月

主任研究者　　網野武博

目　　次

Ⅰ．総括研究報告
保育が子どもの発達に及ぼす影響に関する研究 …… 241
網野武博

Ⅱ．分担研究報告
1．保育効果に関する縦断的研究 …… 244
網野武博

2．夜間に及ぶ長時間保育に関する５年間追跡実証研究 …… 315
安梅勅江

Ⅲ．総合研究報告
保育が子どもの発達に及ぼす影響に関する研究 …… 327
網野武博

Ⅳ．研究成果の刊行に関する一覧表 …… 331

平成15年度厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）
総括研究報告書

保育が子どもの発達に及ぼす影響に関する研究

主任研究者　　網 野 武 博（上智大学）

研究要旨

次世代育成支援等、子育て支援の重要性への認識がますます高まる中で、保育所保育が一層重視されてきている。しかし、従来から乳児保育が子どもの発達に及ぼす影響、並びに長時間保育が子どもの発達に及ぼす影響については、一般的にも、また専門家の間でも主観的、価値観的にマイナス論として論議され、その影響も無視できない部分があった。本研究は、そのことに対する科学的、客観的分析をあらためて加えるために、保育効果に関する縦断的研究をすすめることを目的として、３年計画の最終年度研究を行った。具体的には「保育効果に関する縦断的研究」（分担研究 1）では第２年度に実施した中学生・高校生およびその保護者への質問紙調査について、保護者の回答を中心に分析した。「夜間に及ぶ長時間保育に関する５年間追跡実証研究」（分担研究 2）では５年にわたる追跡調査に基づき、夜間に及ぶ長時間保育が５年後の子どもの発達にどのような影響を与えるのか、その複合的な要因を明らかにすることを目的として実施した。

３年間にわたる研究を通じて、早期からの保育体験や長時間にわたる保育を受けたこと、そのこと自体の子どもの発達への直接的な関連は見出されず、保育サービスの質や家庭におけるケアの質の重要性が改めて示唆される結果であった。

分担研究者と分担研究課題
網野武博（上智大学）
　保育効果に関する縦断的研究
安梅勅江（浜松医科大学）
　夜間に及ぶ長時間保育に関する５年間追跡実証研究

A．研究目的

近年、子育て支援の重要性への認識が高まる中で、保育所保育が一層重視されてきている。しかし、従来から乳児保育が子どもの発達に及ぼす影響、並びに長時間保育が子どもの発達に及ぼす影響については、一般的にも、また専門家の間でも主観的、価値観的にマイナス論として論議され、その影響も無視できない部分があった。本研究は、そのことに対する科学的、客観的分析をあらためて加えるために、保育効果に関する縦断的研究をすすめることを目的として行ってきた３年計画の最終年度である。

B．研究方法

分担研究１

１）０歳からの保育が発達に及ぼす影響に関する研究　－質問紙調査－

第２年度に実施した中学生・高校生およびその保護者を対象とした質問調査について、保護者の回答を中心に分析し（n＝ 2,115 名）、自身の保育経験、あるいは子どもの保護者として保育を利用した経験と、成人期における発達との

関連について検討した。

また、本年度は大学生およびその保護者に対して、昨年度同様の質問紙調査を実施した（1050組配布、回収は大学生218名（回収率20.8%）、保護者208名（回収率19.8%））。昨年度調査（協力保育園）の大学生42名を加えた256名について分析を行った。

2）0歳からの保育が発達に及ぼす影響に関する研究　－保護者調査自由記述分析－

子どもの保育経験に対する保護者の期待や不安についてより具体的に把握することを目的とし、第2年度実施した質問紙調査における保護者の自由記述に焦点をあてて、その内容を分析した。

3）0歳からの保育が発達に及ぼす影響に関する研究　－聞き取り調査－

第2年度実施した質問紙調査の協力者のなかから、低年齢児期（0～1歳）からの保育を経験した15歳から18歳までの5名（男子3名、女子2名）、及びその保護者（父親2名、母親3名）に対し、半構造化面接による聞き取り調査を実施した。

分担研究2

1998年、2003年に全国の認可保育園の子どもと保護者に対し実施したアンケート調査で、紙面により同意協力が得られた1998年保護者2,768名、子ども3,370名（回収率84.7%）、2003年保護者2,743名、子ども3,626名（回収率78.0%）を対象とした。このうち、1998年調査、2003年調査の双方に回答した保護者と子どもの組み合わせ、どちらかの調査が欠損している組を除外した185組を分析対象とした。なお、1998年時点の有効回答と分析対象の間に、子どもの年齢と性別について分布に差異のないことを確認した。

5年後の子どもの発達に対する複合的な要因を明らかにするため、育児支援を独立変数とし、従属変数には5年後の子どもの発達、調整変数には育児環境、子どもの適応状態、性別、年齢を投入し、多重ロジスティック回帰分析でステップワイズ法を用いて発達リスクに対するオッズ比を検討した。

C．研究結果及び考察

分担研究1：

1）保護者調査の分析結果からは、保護者自身の保育経験は、就労と子育ての両立についての認識や性役割観、保育の評価とほとんど関連が見られなかったが、子どもの保護者として保育を利用した経験はこれらと深く関連しており、子どもが低年齢から保育を利用した保護者ほど、固定的な性役割観や三歳児神話にとらわれず、就労と子育てについて柔軟な意識を持っていること、また低年齢からの保育を肯定的に評価していることが明らかになった。昨年度の分析において、子どもの性役割観や保育についての評価は子ども自身の保育経験と強く関連していたが、その保護者の世代においては、自身の保育経験ではなく、親として保育を利用した経験が、これらの認識の発達を促したと考えられる。現在の中高生が経験した保育は、その経験者である子どもと保護者から、一定の評価を得ていると言えるだろう。

また、大学生調査の結果では、特に保育専攻の学生は、自由記述で保育に関する肯定的な思い出を語ることが多く、保育経験が進路選択を後押しした可能性が示唆された。

2）子どもの保育経験に関する保護者の自由記述からは、保育経験によって子どもが多様な側面で育つことへの期待とともに、とくに入園当初において、低年齢から子どもを預けることにより親の愛情やスキンシップが不足するのではないかという不安やつらさ、さらには周囲への気兼ねといった「三歳児神話」の影響が窺われた。一方、保育者の子ども・保護者双方への暖かい関わりが長く心に残っていることも示され、揺れ動く保護者を支える保育者の役割の意義が提示された。

3）聞き取り調査の結果からは、質問紙調査の分析によって有意な差が認められた内容即ち、就労と子育てについての柔軟な意識や低学年か

らの保育に関する肯定的評価を立証するものであり、子ども自身の保育経験及び保護者の保育所利用経験の相違が、子どもの思春期以降の価値観に影響を及ぼすという経験主義的効果が示唆されるものであった。

以上、３年間にわたる研究を通じて保育の質と保育効果が深く関連していることを確認するとともに、年齢・発達段階によるアタッチメント形成と親子の分離体験の克服等の課題が残された。

分担研究２：

５年後の子どもの発達に対する各要因の複合的な関連を明らかにするために、性別,年齢,育児環境、子どもの状態の全ての項目を統制要因として投入した多重ロジスティック回帰分析により,発達リスクに対するオッズ比を検討した。

「微細運動」については育児相談者がいない場合いる場合の115.7倍、「対人技術」、「理解」については家族で一緒に食事をする機会がめったにない場合はある場合の各々70倍、43.7倍、5年後の発達リスクが有意に高くなっていた。いずれも＜保育利用時間＞については、有意な関連は認められなかった。

５年後の子どもの発達に影響を与える要因の複合的な関連分析により、子どもの発達には「保護者へのサポートがあるかどうか」「子どもの発達に見合った適切な働きかけがなされているかどうか」が関連し、＜保育利用時間＞は関連要因として抽出されなかった。

D. 結論

３年にわたる研究を通じて、早期からの保育体験や長時間にわたる保育を受けたこと、そのこと自体の子どもの発達への直接的な関連は見出されず、保育サービスの質や家庭におけるケアの質の重要性が改めて示唆される結果であった。

平成15年度厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）

分担研究報告書

保育効果に関する縦断的研究（Ⅲ）

分担研究者　網野武博　（上智大学）
協力研究者　増田まゆみ　（小田原女子短期大学）
　　柝尾　勲　（立正大学）
　　安治陽子　（日本子ども家庭総合研究所）
　　高辻千恵　（東京大学大学院）
　　尾木まり　（子どもの領域研究所）
　　木村昭仁　（竜雲寺保育園）
　　硯川和歌子　（かっぱ保育園）

研究要旨

乳幼児の保育所入所の始期、期間、保育の質,家庭との連携等々が、乳幼児期及びその後の児童期、青年期さらには成人期に及ぼす影響を多面的に、縦断的に調査研究し、今後の保育所のケアのあり方、家庭や地域との連携のあり方、母子関係・父子関係、愛着関係のあり方等に関する課題並びに展望について検討を加えることを目的とした。

今年度の研究では、第２年度に中学生・高校生およびその保護者を対象として実施した質問紙調査について、保護者の回答を中心に分析し（n=2115名）、自身の保育経験、あるいは子どもの保護者として保育を利用した経験と、成人期における発達との関連について検討した。その結果、保護者自身の保育経験は、就労と子育ての両立についての認識や性役割観、保育の評価とほとんど関連が見られなかったが、子どもの保護者として保育を利用した経験はこれらと深く関連しており、子どもが低年齢から保育を利用した保護者ほど、固定的な性役割観や三歳児神話にとらわれず、就労と子育てについて柔軟な意識を持っていること、また低年齢からの保育を肯定的に評価していることが明らかになった。

また今年度は、大学生およびその保護者を対象に同様の調査を実施し、大学生256名についての分析を行った。特に保育専攻の学生は、自由記述で保育に関する肯定的な思い出を語ることが多く、保育経験が進路選択を後押しした可能性が示唆された。

子どもの保育経験に関する保護者の自由記述からは、保育経験によって子どもが多様な側面で育つことへの期待とともに、とくに入園当初において、低年齢から子どもを預けることにより親の愛情やスキンシップが不足するのではないかという不安やつらさ、さらには周囲への気兼ねといった「三歳児神話」の影響が窺われた。一方、保育者の子ども・保護者双方への暖かい関わりが長く心に残っていることも示され、揺れ動く保護者を支える保育者の役割の意義が提示された。

低年齢児期（０～１歳）からの保育を経験した15歳から18歳までの５名、及びその保護者に対して実施した聞き取り調査の結果は、質問紙調査の分析によって有意な差が認められた内容即ち、就労と子育てについての柔軟な意識や低学年からの保育に関する肯定的評価を立証するものであり、子ども自身の保育経験及び保護者の保育所利用経験の相違が、子どもの思春期以降の価値に影響を及ぼすという経験主義的効果が示唆されるものであった。

３年間にわたる研究を通じて保育の質と保育効果が深く関連していることを確認するとともに、年齢・発達段階によるアタッチメント形成と親子の分離体験の克服等の課題が残された。

1　0歳からの保育が子どもの発達に及ぼす影響に関する研究

－質問紙調査－

1．問題

少子高齢社会を迎えたわが国では、子育て支援の重要性への認識が高まり、その中でも保育所での保育がますます重要視されるようになってきている。しかし、発達早期から、特に乳児期ないし幼児期前期から保育を受けることが子どもの発達に及ぼす影響については、今でも否定的に捉えられることが多い。その背景の一つとなっているのは、伝統的な性別役割分業意識や、いわゆる“三歳児神話”であろう。すなわち、「男性は仕事、女性は家庭」という固定的な性役割を肯定する意識や、「子どもが小さいうち（特に3歳くらいまで）は母親が子育てに専念して家庭で養育すべき」という伝統的な価値観が、発達早期からの保育を望ましくないとする意識を形成する一因となっていると考えられる。社会経済状況が変化し、人々の価値観が変化していることは事実であるが、しかし、このような価値観は人々の意識の中に潜在しているように思われる。現在、保育の需要は高まりを見せ、特に乳児保育や低年齢児保育といった、発達早期からの保育の需要は大きく伸びてきている。しかしその一方で、発達早期から保育を経験することが子どもの発達によくない影響を及ぼすのではないか、という漠然とした危惧を抱いている人も多い。保育の需要が高まり、実際に発達早期から保育を経験する子どもが増加している現在、保育が子どもの発達に及ぼす影響について、実証的に検討することは喫緊の課題であろう。

その際、中長期的な発達への影響を検討する視点が必要であろう。乳幼児期の発達に及ぼす影響については、特に海外においてある程度の知見が蓄積されている。しかし、思春期、青年期、成人期までを視野に入れた研究はそれほど多くはない。例えば、成人期に親として保育を利用した経験が、それまでの価値観の改変や再形成をもたらすといったことがあるとすれば、保育における子育て支援のあり方や、親子の共発達への支援について検討するうえで興味深い。

また、ある程度探索的に多くの変数を取り上げ、発達の諸領域について検討する必要もあるだろう。特に、わが国の社会的背景を考慮し、性役割観や三歳児神話に関わるような就労と子育て、および保育についての意識の発達についても取り上げることが有益であろう。

乳幼児期における保育と、その後の思春期、青年期、成人期における発達との間には様々な要因が関与しており、またそれらが複雑に交絡して個人の発達に影響を及ぼしていると考えられる。したがって、その影響関係について安易な考察をすることには自戒的でなければならない。しかしまずは、保育が子どもの発達にどのような影響を及ぼすのかについて探索的に検討し、将来的にはそれが保育や子育ての現場への具体的な提言を可能になるよう、研究を進めていくことが必要であろう。

2．目的

以上をふまえて、本研究の目的を以下のように定める。乳幼児期における保育経験、あるいは成長後に親となって保育を利用した経験が、現在の愛着（アタッチメント）の発達、社会情緒的発達、行動発達、就労と子育ておよび保育についての意識の発達と関連があるのかどうか、あるとすればどのような関連があるのかを明らかにし、保育が青年期から成人期における心理社会的発達に及ぼす影響について検討する。

3．方法

質問紙調査を実施した。以下の**サンプル①②**は昨年（平成14年）度の調査、**サンプル③**は今年度の調査である。

(1)対象

<u>サンプル①</u>：A 市（地方都市）の中学校・高等

学校に在学する生徒2532名（中学校3校1357名、高等学校4校1175名）（回収率：93.1％）、およびその保護者2007名（回収率73.8％）。

サンプル②：私立保育園（地方都市3市の計7園）の卒園生（12～24歳）226名（回収率20.8％）、およびその保護者256名（回収率23.6％）。

サンプル③：都内および近郊、さらにB県の大学、短大、専門学校生218名（回収率20.8％）およびその保護者208名（回収率19.8％）。

(2)調査時期

サンプル①②：2002年11月～2002年12月

サンプル③　：2003年9月～2003年10月

(3)調査手続き

子ども調査用質問紙（14年度報告書参照）と保護者調査用質問紙（資料1）を作成した。いずれも無記名回答だが、親子ペアを識別するための番号を表紙につけ、同じ番号の質問紙を1部ずつペアにして封入した「質問紙セット」を用意した。学校あるいは協力保育園を通して配布、1～2週間程度留め置いた後、回収した。

サンプル①：中学校・高等学校を通しての調査

「質問紙セット」を学校で配布し、子ども調査用質問紙は学校で一斉に実施した。プライバシーへの配慮から、回答は生徒自身が回収用封筒に入れて封をしたうえで回収した。その後、「質問紙セット」に残った保護者調査用質問紙を生徒が家庭に持ち帰り、保護者が回答、同様に回収用封筒に入れて保護者自身が封をしたうえで、生徒が学校に持参して回収した。

なお、高等学校1校においては、事前に学校と相談した結果、一部の項目を除いて調査を実施した。

サンプル②：協力保育園を通しての調査

協力保育園の卒園者名簿をもとに、平成2年度～平成7年度の卒園生（調査時点で中学1年生から高校3年生にあたる年齢）を抽出し、自宅宛に「質問紙セット」を郵送した。サンプル①と同様、親子別々の回収用封筒にて協力保育園宛に返送していただき、回収した。

サンプル③：大学等を通しての調査

「質問紙セット」を大学等で配布し、持ち帰って各自回答の後、子ども調査用質問紙、保護者調査用質問紙をそれぞれ別の返信用封筒で郵送により回収した。

(4)調査内容

中高生を対象とした子ども調査の内容および分析結果は、平成14年度報告書を参照されたい。

保護者調査の具体的な項目については、保護者調査用質問紙（資料1）および「4－2．因子分析」表4-2-1～表4-2-13を参照されたい。

＊保護者調査用質問紙　※【　】内は質問紙の項目番号

＜子どもおよび子育てについて＞

0．プロフィールの確認【1】
①子どもとの続柄　②子どものきょうだい数および出生順位
1．乳幼児期における保育経験【2】【3】→ 子ども調査における回答の補完・修正
　どのような保育を（保育所、幼稚園など）、何歳から経験させたか。
2．乳幼児期における母親の就労→ 子ども調査における回答の補完・修正
　就労の有無および就労開始時期【4】
　乳幼児期に母親は就労していたか、それは何歳からか。
3．保育所に通わせることについての意識【5】（4件法）
　保育所への信頼、子どもとの分離に関する意識、子どもの発達への心配や期待、
　一緒に過ごせる時間における補償的行動
4．幼稚園に通わせることについての意識【6】（4件法）
　幼稚園への信頼、子どもとの分離に関する意識、子どもの発達への心配や期待、
　一緒に過ごせる時間における補償的行動
5．乳幼児期における養育行動：敏感性・応答性【7】（4件法）
　子どもが乳幼児期に、親として敏感で応答的なかかわりをどの程度していたか。

<保護者自身について>：子ども調査用質問紙の項目に対応
0．プロフィール【8】【9】 ①年齢、②性別、③きょうだい数および出生順位、④両親について 1．乳幼児期における保育経験【10】【12】 どのような保育を（保育所、幼稚園など）、何歳から経験したか。 2．乳幼児期における母親の就労 ①就労の有無および就労開始時期【11】 乳幼児期に母親は就労していたか、それは何歳からか。 ②乳幼児期における母親の就労についての認知【15】 母親の就労について、どのように認識し、評価していたか。 3．保育経験についての認知 ①保育経験の評価【13】（4件法） 保育園や幼稚園は楽しかったか、行ってよかったと思うか。 ②保育者との関係性についての認知【17】（4件法） 保育者との関係性において、信頼感・安心感を感じられたか。 4．保育に伴う親との分離についての認知【14】（4件法） ①父親との分離についての認知 父親との分離をどう認識していたか、父親は普段よく関わってくれたか。 ②母親との分離についての認知 母親との分離をどう認識していたか、母親は普段よく関わってくれたか。 5．親子関係についての認知【16】（4件法） ①父親との関係性についての認知 父親との関係性において、信頼感・安心感を感じられたか。 ②母親との関係性についての認知 母親との関係性において、信頼感・安心感を感じられたか。 6．被虐待経験の有無およびその未解決【18】（4件法） ①父親による虐待（身体的虐待・心理的虐待・ネグレクト） ②母親による虐待（身体的虐待・心理的虐待・ネグレクト） ③保育者による虐待（身体的虐待・心理的虐待・ネグレクト） さらに、①～③それぞれについて、「今でも許せない」など未解決であるかどうか。 7．社会情緒的発達 ①対人関係における適応【19】（4件法） ②自尊心【20】（5件法） Rosenberg(1965)を邦訳した、山本・松井・山成（1982）の自尊感情尺度を使用した。 ③行動発達（問題行動）【21】（4件法） 8．仕事と子育てについての認知：性役割観【22】（4件法） 女性および男性が子育てをしながら仕事をすることについての意識 9．保育についての一般的意識【23】（4件法） 子どもが保育園に通うことについて、特に低年齢から通うことについての評価

4．結果と考察

本報告では、昨年度実施した質問紙調査のうち、中高生の保護者の回答についての分析結果を主として述べることとする。中高生の回答についての分析結果は、平成14年度報告書を参照されたい。

また、同様の質問紙を使用して今年度実施した、大学生とその保護者を対象とした調査の結果については、回収率の低さに伴うサンプル数の少なさ、男女比の偏りから、昨年度実施した調査と同様の分析を実施できず、思春期から青年期に到るまでの発達的変化を検討することができなかった。したがって、大学生調査については、サンプルの概略を述べるにとどめ（→**4－7．大学生調査の概要**）、今後さらに分析方法を検討していくこととする。

4－0．分析の準備 ― サンプルの整理

1）中高生の保護者について

上記サンプル②（協力保育園ルート）において、子ども調査への回答が得られた 226 名のうち、中高生は 117 名であった。その保護者 108 名にサンプル①の保護者を加えた 2115 名が、本報告における「保護者調査」の分析対象である。

2）大学生について

サンプル②においては、卒園者名簿の年度が異なっていたなどの理由により、結果的に大学生など中学生・高校生相当の年齢範囲になかった 109 名からも回答を得た。このうち、大学生、短大生、専門学校生であることがわかった 42 名については、今年度調査を実施したサンプル③に加えて分析を行った。

なお、本調査は「子ども」と「保護者」の親子ペアを対象にした調査であり、中・高・大学生は「子ども」として位置づけられている。したがって、サンプル③の学生 218 名のうち、自身の子どもがおり、親でもあるサンプル 4 名を分析から除いた。その結果、昨年度および今年度の調査において、大学、短大、専門学校生である合計256名が、本報告の「大学生調査」の分析対象である。

4－1．サンプルの特徴

1）中高生の保護者（表4-1-1～表4-1-7）

・サンプル１，２はいずれも地方都市で、それぞれ異なる地域にある。

・サンプル１の A 市は女性の就業率が高く、低年齢からの保育経験を有する子どもが多いと推測されたため、調査対象として選定された。子どもが通う中学校３校はいずれも国公立、高等学校は普通科高校３校（うち公立１校、私立２校。私立のうち１校は女子校）、専門高校１校（公立）である。A市における中学生・高校生とその保護者の一般的なサンプルであると考えられる。

・サンプル２の協力保育園は、いずれも長年にわたって乳児保育を実施している私立保育園である。

・**子どもとの続柄（表4-1-1）**：母親 1894 名（89.6 %）、父親 163 名（7.7 %）、その他 13 名（0.6 %）、無記入 45 名（2.1 %）。

・**平均年齢（表4-1-2）**：43.6 歳（SD=4.2、レンジ 24 - 76 歳）。

・**出生順位（表4-1-3）**：第１子 805 名（38.1 %）、第２子 703 名（33.2 %）、第３子 357 名（16.9 %）、第４子 115 名（5.4 %）、第５子以降 71 名（3.4 %）、無記入 64 名（3.0 %）であった。

・**保護者自身の保育経験（表4-1-4）**：０歳から保育所 9 名（0.4 %）、１～３歳前から保育所 43 名（2.0 %）、３歳から保育所 923 名（43.6 %）、保育所だが保育開始時期不明 69 名（3.3 %）、幼稚園 779 名（36.8 %）、保育所と幼稚園の両方を経験 66 名（3.1 %）、その他 102 名（4.8 %）、保育経験なし（就学前は家庭養育のみ）96 名（4.5 %）、無記入 28 名（1.3 %）であった。

・**保護者の子ども時代にその母親が就労していたかどうか（表4-1-6）**：０歳から就労 685 名（32.4 %）、１～３歳前から就労 101 名（4.8 %）、３歳から就学前までに就労 150 名（7.1 %）、小学校入学後に就労 135 名（6.4 %）、専業主婦 562 名（26.6 %）、農業・自営業・内職 190 名（9.0 %）、わからない 129 名（6.1 %）、その他 34 名（1.6 %）、無記入 129 名（6.1 %）であった。

・**保護者とその両親との状況（表4-1-7）**：父親と同居 225 名（10.6 %）、別居 1021 名（48.3 %）、死別 760 名（35.9 %）、離別 58 名（2.7 %）、その他 6 名（0.3 %）、無記入 45 名（2.1 %）、母親と同居 331 名（15.7 %）、別居 1424 名（67.3 %）、死別 277 名（13.1 %）、離別 31 名（1.5 %）、その他 9 名（0.4 %）、無記入 43 名（2.0 %）であった。

表 4-1-1　子どもとの続柄

	父	母	その他	無記入	合計
中学校	81 (3.8%)	1008 (47.7%)	5 (0.2%)	21 (1.0%)	1115 (52.7%)
高校	82 (3.9%)	886 (41.9%)	8 (0.4%)	24 (1.1%)	1000 (47.3%)
合計	163 (7.7%)	1894 (89.6%)	13 (0.6%)	45 (2.1%)	2115 (100.0%)

注)「中学校」「高校」: 保護者の子どもが通う学校

表 4-1-2　保護者の年齢

	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代	無記入	合計
中学校	2 (0.1%)	200 (9.5%)	819 (38.7%)	61 (2.9%)	3 (0.1%)	0 (0.0%)	30 (1.4%)	1115 (52.7%)
高校	1 (0.0%)	81 (3.8%)	789 (37.3%)	99 (4.7%)	0 (0.0%)	2 (0.1%)	28 (1.3%)	1000 (47.3%)
合計	3 (0.1%)	281 (13.3%)	1608 (76.0%)	160 (7.6%)	3 (0.1%)	2 (0.1%)	58 (2.7%)	2115 (100.0%)

表 4-1-3　保護者の出生順位

	第一子	第二子	第三子	第四子	第五子～	無記入	合計
中学校	456 (21.6%)	399 (18.9%)	161 (7.6%)	43 (2.0%)	28 (1.3%)	28 (1.3%)	1115 (52.7%)
高校	349 (16.5%)	304 (14.4%)	196 (9.3%)	72 (3.4%)	43 (2.0%)	36 (1.7%)	1000 (47.3%)
合計	805 (38.1%)	703 (33.2%)	357 (16.9%)	115 (5.4%)	71 (3.4%)	64 (3.0%)	2115 (100.0%)

表 4-1-4　保護者の保育経験:保育の種別と開始時期

	0歳～保育所	1歳～保育所	3歳～保育所	保育開始時期不明	幼稚園	保育園+幼稚園	その他	保育経験なし	無記入	合計
中学校	7 (0.3%)	19 (0.9%)	405 (19.1%)	32 (1.5%)	519 (24.5%)	41 (1.9%)	40 (1.9%)	36 (1.7%)	16 (0.8%)	1115 (52.7%)
高校	2 (0.1%)	24 (1.1%)	518 (24.5%)	37 (1.7%)	260 (12.3%)	25 (1.2%)	62 (2.9%)	60 (2.8%)	12 (0.6%)	1000 (47.3%)
合計	9 (0.4%)	43 (2.0%)	923 (43.6%)	69 (3.3%)	779 (36.8%)	66 (3.1%)	102 (4.8%)	96 (4.5%)	28 (1.3%)	2115 (100.0%)

表 4-1-5　保護者の保育経験:保育利用頻度

①週あたり利用日数

1日	2日	2.5～3日	3.5～4日	4.5～5日	5.5～6日	6.5～7日	無記入	合計
2 (0.1%)	1 (0.0%)	6 (0.3%)	7 (0.3%)	220 (10.4%)	1526 (72.2%)	19 (0.9%)	334 (15.8%)	2115 (100.0%)

②1日あたり利用時間

1～3 時間未満	3～4 時間未満	4～5 時間未満	5～6 時間未満	6～7 時間未満	7～8 時間未満	8～9 時間未満	9～10 時間未満	10 時間以上	無記入	総数
3 (0.1%)	16 (0.8%)	106 (5.0%)	336 (15.9%)	484 (22.9%)	405 (19.1%)	297 (14.0%)	28 (1.3%)	10 (0.5%)	430 (20.3%)	2115 (100.0%)

表 4-1-6　保護者の母親の就労

	0歳の時から就労	1歳から3歳になる前に就労復帰(開始)	3歳になってから小学校入学前までに就労復帰(開始)	小学校 入学後 就労開始(復帰)	専業主婦	農業・自営業・内職	わからない	その他	無記入	合計
中学校	368 (17.4%)	55 (2.6%)	82 (3.9%)	70 (3.3%)	336 (15.9%)	79 (3.7%)	50 (2.4%)	18 (0.9%)	57 (2.7%)	1115 (52.7%)
高校	317 (15.0%)	46 (2.2%)	68 (3.2%)	65 (3.1%)	226 (10.7%)	111 (5.2%)	79 (3.7%)	16 (0.8%)	72 (3.4%)	1000 (47.3%)
合計	685 (32.4%)	101 (4.8%)	150 (7.1%)	135 (6.4%)	562 (26.6%)	190 (9.0%)	129 (6.1%)	34 (1.6%)	129 (6.1%)	2115 (100.0%)

表 4-1-7　保護者とその両親の状況

	同居	別居	死別	離別	その他	無記入	合計
父親	225 (10.6%)	1021 (48.3%)	760 (35.9%)	58 (2.7%)	6 (0.3%)	45 (2.1%)	2115 (100.0%)
母親	331 (15.7%)	1424 (67.3%)	277 (13.1%)	31 (1.5%)	9 (0.4%)	43 (2.0%)	2115 (100.0%)

2）大学生（表 4-1-8～表 4-1-14）

・平均年齢（表 4-1-8）：20.5 歳（SD＝2.7、レンジ 18－37 歳）。

・学校種別（表 4-1-9）：大学 116 名（45.3％）、短大 100 名（39.1％）、専門学校 35 名（13.7％）、大学院生 5 名（2.0％）。

・性別（表 4-1-10）：女子 209 名（81.6％）、男子 46 名（18.0％）、不明 1 名（0.4％）。

表 4－1－8　年齢

18 歳	19 歳	20 歳	21 歳	22 歳	23 歳	24 歳	25～28 歳	30 歳～	合計
36 (14.1%)	77 (30.1%)	59 (23.0%)	28 (10.9%)	21 (8.2%)	13 (5.1%)	9 (3.5%)	7 (2.7%)	6 (2.3%)	256 (100.0%)

表 4－1－9　学校

	1年	2年	3年	4年	無記入	小計	合計
大学	31 (12.1%)	35 (13.7%)	28 (10.9%)	19 (7.4%)	3 (1.2%)	116 (45.3%)	256 (100.0%)
短大	51 (19.9%)	42 (16.4%)	1 (0.4%)	0 (0.0%)	6 (2.3%)	100 (39.1%)	
専門学校	28 (10.9%)	1 (0.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	6 (2.3%)	35 (13.7%)	
大学院	3 (1.2%)	1 (0.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (0.4%)	5 (2.0%)	

※短大には「短大専攻科3年」(N=1)を含む

表 4－1－10　性別

	女子	男子	無記入	合計
大学	79 (30.9%)	36 (14.1%)	1 (0.4%)	116 (45.3%)
短大	98 (38.3%)	2 (0.8%)	0 (0.0%)	100 (39.1%)
専門学校	31 (12.1%)	4 (1.6%)	0 (0.0%)	35 (13.7%)
大学院	1 (0.4%)	4 (1.6%)	0 (0.0%)	5 (2.0%)
合計	209 (81.6%)	46 (18.0%)	1 (0.4%)	256 (100.0%)

表 4－1－11 出生順位

	第一子	第二子	第三子	第四子～	合計
大学	63 (24.6%)	40 (15.6%)	13 (5.1%)	0 (0.0%)	116 (45.3%)
短大	53 (20.7%)	41 (16.0%)	5 (2.0%)	1 (0.4%)	100 (39.1%)
専門学校	18 (7.0%)	15 (5.9%)	2 (0.8%)	0 (0.0%)	35 (13.7%)
大学院	4 (1.6%)	1 (0.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (2.0%)
合計	138 (53.9%)	97 (37.9%)	20 (7.8%)	1 (0.4%)	256 (100.0%)

表 4－1－12 家族構成

	両親と子ども	単親と子ども	両親・祖父母と子ども	単親・祖父母と子ども	親・親戚等と子ども	子ども単身	その他	合計
大学	60 (23.4%)	5 (2.0%)	15 (5.9%)	2 (0.8%)	0 (0.0%)	32 (12.5%)	2 (0.8%)	116 (45.3%)
短大	62 (24.2%)	9 (3.5%)	21 (8.2%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	8 (3.1%)	0 (0.0%)	100 (39.1%)
専門学校	15 (5.9%)	0 (0.0%)	2 (0.8%)	1 (0.4%)	1 (0.4%)	13 (5.1%)	3 (1.2%)	35 (13.7%)
大学院	2 (0.8%)	0 (0.0%)	2 (0.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (0.4%)	0 (0.0%)	5 (2.0%)
合計	139 (54.3%)	14 (5.5%)	40 (15.6%)	3 (1.2%)	1 (0.4%)	54 (21.1%)	5 (2.0%)	256 (100.0%)

表 4－1－13 保育の種別と開始時期

	0歳～保育所	1歳～保育所	3歳～保育所	保育開始時期不明	幼稚園	保育園+幼稚園	合計
大学	12 (4.7%)	21 (8.2%)	17 (6.6%)	1 (0.4%)	62 (24.2%)	3 (1.2%)	116 (45.3%)
短大	3 (1.2%)	7 (2.7%)	16 (6.3%)	0 (0.0%)	67 (26.2%)	7 (2.7%)	100 (39.1%)
専門学校	2 (0.8%)	3 (1.2%)	14 (5.5%)	0 (0.0%)	14 (5.5%)	2 (0.8%)	35 (13.7%)
大学院	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (0.8%)	0 (0.0%)	3 (1.2%)	0 (0.0%)	5 (2.0%)
合計	17 (6.6%)	31 (12.1%)	49 (19.1%)	1 (0.4%)	146 (57.0%)	12 (4.7%)	256 (100.0%)

表 4－1－14 母親の就労

	0歳の時から就労	1歳から3歳になる前に就労復帰（開始）	3歳から小学校入学前までに就労復帰（開始）	小学校入学後就労開始（復帰）	専業主婦	わからない	その他	無記入	合計
大学	35 (13.7%)	9 (3.5%)	11 (4.3%)	3 (1.2%)	50 (19.5%)	5 (2.0%)	1 (0.4%)	2 (0.8%)	116 (45.3%)
短大	22 (8.6%)	3 (1.2%)	11 (4.3%)	3 (1.2%)	58 (22.7%)	0 (0.0%)	2 (0.8%)	1 (0.4%)	100 (39.1%)
専門学校	10 (3.9%)	1 (0.4%)	3 (1.2%)	1 (0.4%)	14 (5.5%)	2 (0.8%)	3 (1.2%)	1 (0.4%)	35 (13.7%)
大学院	2 (0.8%)	0 (0.0%)	1 (0.4%)	1 (0.4%)	1 (0.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (2.0%)
合計	69 (27.0%)	13 (5.1%)	26 (10.2%)	8 (3.1%)	123 (48.0%)	7 (2.7%)	6 (2.3%)	4 (1.6%)	256 (100.0%)

4－2．因子分析

中高生の保護者を対象にした「保護者調査」において、4件法あるいは5件法で回答を求めた項目についてそれぞれ因子分析を行った。主成分解を用い、回転はプロマックス回転を採用した。因子数は、相関係数行列の固有値のうち1より大きいものの数、スクリープロット、因子の解釈可能性等を考慮して決定した。表4-2-1～表4-2-13に因子負荷量行列を示した。因子負荷が概ね0.4以上の項目を採用し、尺度構成を行った。

(1)乳幼児期における母親の就労についての認知　（表4-2-1）

「働いているお母さんはいきいきしていた」「お母さんが働くことを誇りに思っていた」「仕事が楽しそうだった」といった項目からなる「(自分の) 母親の就労の肯定」因子と命名した。因子負荷量の低かった項目7）および1）を除いて尺度化した。クロンバックのα係数は0.73であり、やや低いが、ある程度の内的整合性があるものと判断できる。この因子には、「お母さんは仕事で疲れていた」という項目も正の因子負荷を持っており、就労している母親について「いきいきしていた、楽しそうだった、しかし同時にお母さんは疲れていた」という認知が整合性のあるものとしてなされていることが示された。

(2)保育経験の評価（表4-2-2）

「保育園（幼稚園）は楽しかった」「保育園（幼稚園）に行ってよかった」といったように、自身の経験した保育を肯定的に評価する因子であると解釈し（項目3）8）は逆転項目)、「保育経験に対する肯定的評価」因子と命名した。α係数は0.91であり、内的整合性があるものと判断できる。

(3)保育に伴う父親との分離についての認知　（表4-2-3）

第1因子は、項目7）8）を逆転項目として、「普段から父親にせかされたりせずよく相手になってもらい、休みの日にはよく関わってもらった」という認識の高さを表す因子として尺度化し、「父親の普段のゆとりある関わり」と命名した。

第2因子は、「お父さんの帰りが遅くて寂しかった」「お父さんにはいつも家にいてほしかった」「帰りが遅いと、もう帰ってこないのではないかと心配になった」という3項目からなり、父親との分離時に寂しさや心配を感じ、父親を求める傾向を表す因子であると解釈し、「分離時における父親希求」と命名した。

第3因子は、「お父さんと離れている間、一緒に過ごす大人がいたので寂しくなかった」「保育園や幼稚園で友達と遊ぶのが楽しかったので、お父さんと離れていることは気にならなかった」という2項目からなり、父親以外の大人や友達という二次的対象と関わることによって、寂しさが気にならなかったことを表す因子であると解釈して、「父親以外の二次的対象による寂しさの軽減」と命名した。因子間相関は-.08～.05といずれも低い。α係数は、それぞれ0.66、0.67、0.54であった。いずれの因子も2～3項目のみによって構成されており、α係数も低いため、尺度得点の信頼性には疑問が残るといえる。

(4)保育に伴う母親との分離についての認知　（表4-2-4）

上記（3）とほぼ同じ因子構造を示し、同様に解釈できるが、第1因子は「お母さんにはいつも家にいてほしかった」「お母さんが帰ってくるのが楽しみだった」「帰りが遅いと、もう帰ってこないのではないかと心配になった」「帰りが遅くて寂しかった」という4項目からなり、母親との分離時に寂しさや心配を感じ、母親を求める傾向を表す因子であると解釈し、「分離時における母親希求」と命名した。第2因子は、上記（3）の第1因子に相当するため「母親の普段のゆとりある関わり」と命名、第3因子は「母親以外の二次的対象による寂しさの軽減」

と命名した。因子間相関は-.09～.146で、いずれも低い。α係数は、それぞれ0.69、0.67、0.59であった。上記（3）と同様に信頼性係数が低く、以後の分析においても解釈に留意する必要がある。

(5)父親との関係性についての認知（表4-2-5）

1因子構造が確認された。父親と「一緒にいると楽しい」「一緒にいたい」「信頼している」「一緒にいると安心できる」といった項目からなり、父親との関係性において信頼感や安心感を感じること、すなわち「父子関係の安定性」因子と解釈し、因子負荷の低かった項目15）を除いた全14項目から尺度得点を算出した。項目14)、11)、12)、3)、8)、6)、16)、4)、10)は逆転項目とした。α係数は0.92であった。

(6)母親との関係性についての認知（表4-2-6）

上記（5）父親との関係性についての認知と同様の因子構造が得られ、「母子関係の安定性」因子と命名した。α係数は0.92であった。

(7)保育者との関係性についての認知（表4-2-7）

上記（5）（6）とかなり類似した因子構造が得られ、保育者との関係性も養育にかかわるアタッチメント関係として捉えうることが示唆された。全16項目から「保育者との関係の安定性」尺度得点を算出した。α係数は0.92であった。

(8)対人関係における適応（表4-2-8）

「周囲に相談できる人がいる」「悩みがあるときに相談できる人がいる」「周囲の人に大切にされていると感じることがある」といった項目からなる「対人関係における適応」因子と命名した。項目4）5）6）7）3）を逆転項目として尺度得点を算出した。α係数は0.73であった。

(9)自尊心（表4-2-9）

山本・松井・山成（1982）の自尊感情尺度であり、本来は標準化された尺度として10項目すべてを採用すべきであるが、項目8）「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」の因子負荷量がかなり低いため、この項目を除いて「自尊心」得点を算出することとした。9項目のα係数は0.85であった。

(10)行動発達（表4-2-10）

保護者自身が未成年だった時期の行動問題について、回顧的に回答を求めた。第1因子は、「タバコを吸ってみることがあった」「夜遅くまで家に帰らないで遊ぶことがあった」「お酒を飲んでみることがあった」といった、非行に関わるような外在的行動問題を表す4項目からなり、「外在的行動問題：非行」と命名した。第2因子は、「人からお金や物をとりあげることがあった」「他人やお店の物を盗む（とる）ことがあった」「人に暴力をふるうことがあった」「いじめに加わることがあった」という攻撃的な行動問題を表す4項目からなり、「外在的行動問題：攻撃性」と命名した。第3因子は、「一人で閉じこもり、誰とも会いたくないことがあった」「学校へ行きたくないことがたびたびあった」の2項目からなり、不登校傾向、引きこもり傾向に関連する「内在的行動問題」と命名した。α係数はそれぞれ0.81、0.75、0.73であった。項目3）「家を飛び出すことがあった」は、第1因子と第3因子に同程度の因子負荷が見られたため、除外した。

(11)就労と子育てについての意識（表4-2-11）

第1因子は、「3歳までは女性は子育てに専念すべきである」といったいわゆる“三歳児神話”を表す項目からなり、「三歳児神話の肯定」因子と解釈した。第2因子は、「男性が子育てするのは当然だ」「女性が子育てをしながら仕事をするのはよいことだ」「男性は仕事に専念し、子育ては女性にまかせていればよい（逆転項目）」といった項目の因子負荷が高く、性別にかかわらず男性も女性も就労と子育てをすることについての肯定的意識を表している。「男性は仕事、女性は家事と育児」という伝統的な性別役割分業意識から自由であるものと解釈し、「伝統的性役割観からの自由度」と命名し

た。α係数はそれぞれ0.79、0.62であった。項目数が４項目、３項目と少ないことも、内的整合性が低いことの一つの理由である。

(12)保育についての一般的評価（表4-2-12）

第１因子は、「０歳から保育園に通わせてもよい」「１歳から保育園に通わせてもよい」「子どもが小さいうち（３歳くらいまで）から保育園など親以外の人によって育てられる機会をもつことは、子どもの発達にとってよい影響があると思う」といった項目から、０歳から３歳未満ごろまでに保育を経験することについての評価であると解釈し、「低年齢児保育の肯定」と命名した。第２因子は、「保育園に通わせることはよいことだ」というように保育所に子どもを通わせることについての全般的評価であり、「保育所保育の肯定」と命名した。α係数はそれぞれ0.77、0.66であった。

(13)乳幼児期における養育行動：敏感性・応答性　（表4-2-13）

子どもが乳幼児であったころ、親としてどのようにかかわっていたか、について回答を求めた。「子どもの話や活動に注意を向け、きちんと反応するようにしていた」「子どもの気持ちを読みとろうと心がけていた」といった項目から、子どもの要求や状態を敏感にくみ取り、適切に応答しようとする態度、行動を表す項目からなる因子と解釈し、「乳幼児期における親としての応答的かかわり」と命名した。因子負荷の低かった項目３）「子どもをむやみに管理しようとしていた」を除いて尺度化した。α係数は0.78であった。回顧データであることから、実際にそのような養育行動をとっていたかどうかは明らかにできないが、保護者の認知した応答性として捉えることができるだろう。

表4-2-1　乳幼児期における母親の就労についての認知

	第１因子	共通性
3) 働いているお母さんはいきいきしていた。	**.865**	.749
2) お母さんが働くことを誇りに思っていた。	**.801**	.642
4) お母さんは仕事が楽しそうだった。	**.783**	.613
6) お母さんが働いているのは、自分たち家族のためだと思っていた。	**.603**	.363
5) お母さんは仕事で疲れていた。	**.375**	.141
7) お母さんは、子どものことよりも仕事が大事そうだった。	.075	.005
1) お母さんが働くことに不満を感じていた。	-.008	.000
寄与	2.515	2.515
寄与率（%）	35.9	

→　「(自分の) 母親の就労への肯定的評価」尺度（α＝.73）

表4-2-2　保育経験の評価

	第１因子	共通性
1) 保育園（幼稚園）は楽しかった。	**.873**	.762
7) 保育園（幼稚園）でたくさん遊ぶことができた。	**.844**	.712
2) 保育園（幼稚園）に行ってよかった。	**.842**	.710
6) 保育園（幼稚園）でいろいろな経験から学ぶことができた。	**.812**	.659
4) 保育園（幼稚園）で友達がたくさんできた。	**.793**	.629
5) 保育園（幼稚園）で生活習慣が身についた。	**.752**	.566
3) 保育園（幼稚園）には行きたくなかった。	**-.600**	.361
8) 保育園（幼稚園）ではよい思い出がほとんどない。	**-.739**	.546
寄与	4.949	4.949
寄与率（%）	61.9	

→　「保育経験に対する肯定的評価」尺度（α＝.91）

表4-2-3　保育に伴う父親との分離についての認知

	第１因子	第２因子	第３因子	共通性
7）お父さんはいつも忙しそうで、相手にしてくれなかった。	**.813**	.195	.194	.699
8）お父さんはいつもイライラして怒りっぽく、せかされることが多かった。	**.693**	.191	.058	.503
4）お父さんが帰ってくるのが楽しみだった。	-.582	.447	.247	.659
9）お父さんは休みの日には遊んだり話したりして相手をしてくれた。	**-.735**	.134	.032	.573
1）お父さんの帰りが遅くて寂しかった。	.118	**.772**	-.080	.604
2）お父さんにはいつも家にいてほしかった。	-.169	**.757**	.002	.615
3）お父さんの帰りが遅いと、もう帰ってこないのではないかと心配になった。	.200	**.734**	-.140	.580
5）お父さんと離れている間、一緒に過ごす大人がいたので寂しくなかった	.032	-.065	**.822**	.672
6）保育園や幼稚園で友達と遊ぶのが楽しかったので、お父さんと離れていることは気にならなかった。	.077	-.104	**.807**	.651
寄与	2.093	2.010	1.445	5.559
寄与率（%）	23.3	22.3	16.1	61.7

因子間相関

	第１因子	第２因子	第３因子
第１因子			
第２因子	-.047		
第３因子	-.081	.048	

→（第１因子）「父親の普段のゆとりある関わり」尺度（α＝.66）
（第２因子）「分離時における父親希求」尺度（α＝.67）
（第３因子）「父親以外の二次的対象による寂しさの軽減」尺度（α＝.54）

表4-2-4　保育に伴う母親との分離についての認知

	第１因子	第２因子	第３因子	共通性
11）お母さんにはいつも家にいてほしかった。	**.813**	-.051	-.037	.652
13）お母さんが帰ってくるのが楽しみだった。	**.778**	-.242	.234	.682
12）お母さんの帰りが遅いと、もう帰ってこないのではないかと心配になった。	**.612**	.162	-.225	.482
10）お母さんの帰りが遅くて寂しかった。	**.611**	.302	-.111	.535
16）お母さんはいつも忙しそうで、相手にしてくれなかった	.173	**.825**	.158	.755
17）お母さんはいつもイライラして怒りっぽく、せかされることが多かった。	.112	**.744**	.047	.587
18）お母さんは休みの日には遊んだり話したりして相手をしてくれた。	.268	**-.710**	.059	.533
14）お母さんと離れている間、一緒に過ごす大人がいたので寂しくなかった。	-.026	.072	**.834**	.690
15）保育園や幼稚園で友達と遊ぶのが楽しかったので、お母さんと離れていることは気にならなかった。	-.067	.050	**.819**	.667
寄与	2.090	1.869	1.505	5.588
寄与率（%）	23.2	20.8	16.7	60.7

因子間相関

	第１因子	第２因子	第３因子
第１因子			
第２因子	.146		
第３因子	.022	-.088	

→（第１因子）「分離時における母親希求」尺度（α＝.69）
（第２因子）「母親の普段のゆとりある関わり」尺度（α＝.67）
（第３因子）「母親以外の二次的対象による寂しさの軽減」尺度（α＝.59）

表4-2-5　父親との関係性についての認知

	第１因子	共通性
14) お父さんと話したいとは思わない。	**.765**	.585
12) お父さんと一緒にいるとき、何となく不安になったり、気持ちが混乱したりすることがある。	**.762**	.581
8) お父さんの行動はわけがわからず、とまどうことがある。	**.753**	.567
10) お父さんに対して腹立たしく思うことが多い。	**.716**	.513
16) お父さんと一緒にいるとき、おびえたような気持ちになることがある。	**.711**	.506
4) お父さんの行動は予測がつかなくてこわい。	**.697**	.486
11) お父さんには見捨てられて（見放されて）いるような気がする。	**.666**	.444
3) お父さんは私の気持ちをわかってくれない。	**.659**	.435
6) お父さんが言うことは、私には関係がないと思っている。	**.654**	.428
7) お父さんに何か話しても伝わらなくて寂しい気持ちになる。	**.647**	.419
15) お父さんに私のことをもっと気にかけてもらいたい。	.216	.047
13) いざというときには、お父さんは私を助けてくれると思う。	**-.576**	.332
9) お父さんを信頼している。	**-.653**	.426
2) お父さんと一緒にいたいと思う。	**-.678**	.459
5) お父さんと一緒にいると安心できる。	**-.682**	.465
1) お父さんと一緒にいると楽しい。	**-.686**	.470
寄与	7.170	7.170
寄与率（%）	44.8	

→　「父子関係の安定性」尺度（α＝.92）

4-2-6　母親との関係性についての認知

	第１因子	共通性
14) お母さんと話したいとは思わない。	**.733**	.538
11) お母さんには見捨てられて（見放されて）いるような気がする。	**.643**	.413
12) お母さんと一緒にいるとき、何となく不安になったり、気持ちが混乱したりすることがある。	**.633**	.401
3) お母さんは私の気持ちをわかってくれない。	**.603**	.364
6) お母さんが言うことは、私には関係がないと思っている。	**.569**	.324
8) お母さんの行動はわけがわからず、とまどうことがある。	**.560**	.314
4) お母さんの行動は予測がつかなくてこわい。	**.521**	.272
16) お母さんと一緒にいるとき、おびえたような気持ちになることがある。	**.519**	.269
10) お母さんに対して腹立たしく思うことが多い。	**.500**	.250
7) お母さんに何か話しても伝わらなくて寂しい気持ちになる。	**.361**	.130
15) お母さんに私のことをもっと気にかけてもらいたい。	.042	.001
13) いざというときには、お母さんは私を助けてくれると思う。	**-.606**	.368
2) お母さんと一緒にいたいと思う。	**-.671**	.451
1) お母さんと一緒にいると楽しい。	**-.678**	.460
5) お母さんと一緒にいると安心できる。	**-.680**	.462
9) お母さんを信頼している。	**-.688**	.474
寄与	5.499	5.499
寄与率（%）	34.4	

→　「母子関係の安定性」尺度（α＝.92）

表4-2-7　保育者との関係性についての認知

	第１因子	共通性
11)保育園や幼稚園の先生には見捨てられて（見放されて）いるような気がしていた。	**.828**	.686
12)保育園や幼稚園の先生と一緒にいるとき、何となく不安になったり、気持ちが混乱したりすることがあった。	**.814**	.662
10)保育園や幼稚園の先生に対して腹立たしく思うことが多かった。	**.783**	.613
7) 保育園や幼稚園の先生に何か話しても伝わらなくて寂しい気持ちになった。	**.775**	.600
8) 保育園や幼稚園の先生の行動はわけがわからず、とまどうことがあった。	**.767**	.589
16)保育園や幼稚園の先生と一緒にいるとき、おびえたような気持ちになることがあった。	**.763**	.583
14)保育園や幼稚園の先生と話したいとは思わなかった。	**.755**	.570
4) 保育園や幼稚園の先生の行動は予測がつかなくてこわかった。	**.702**	.494
6) 保育園や幼稚園の先生が言うことは、私には関係がないと思っていた。	**.693**	.480
3) 保育園や幼稚園の先生は私の気持ちをわかってくれなかった。	**.645**	.416
15)保育園や幼稚園の先生に私のことをもっと気にかけてもらいたかった。	**.460**	.211
2) 保育園や幼稚園の先生と一緒にいたいと思っていた。	**-.517**	.267
13)いざというときには、保育園や幼稚園の先生は私を助けてくれると思っていた。	**-.573**	.329
5) 保育園や幼稚園の先生と一緒にいると安心できた。	**-.596**	.355
1) 保育園や幼稚園の先生と一緒にいると楽しかった。	**-.597**	.356
9) 保育園や幼稚園の先生を信頼していた。	**-.658**	.434
寄与	7.652	7.652
寄与率（%）	47.8	

→　「保育者との関係の安定性」尺度（α＝.92）

表4-2-8　対人関係における適応

	第１因子	共通性
4) 周囲の人とはあまり深くかかわりたくない。	**.631**	.398
5) 周囲の人に言いたいことがあってもなかなか言えないことがある。	**.617**	.381
6) 周囲の人に無理に話を合わせることがある。	**.545**	.297
7) 周囲の人に無視されたり、ひどいことを言われたりすることがある。	**.539**	.290
3) 周囲の人に対して腹立たしく思うことがある。	**.474**	.225
8) 周囲の人に大切にされていると感じることがある。	**-.554**	.307
2) 悩みがあるときに相談できる人がいる。	**-.668**	.446
1) 周囲に信頼できる人がいる。	**-.670**	.449
寄与	2.796	2.796
寄与率（%）	35.0	

→　「対人関係における適応」尺度（α＝.73）

表4-2-9　自尊心

	第１因子	共通性
2) 色々な良い素質をもっている。	**.751**	.564
1)少なくとも人並みには、価値のある人間である。	**.741**	.550
7) だいたいにおいて、自分に満足している。	**.661**	.437
4) 物事を人並みには、うまくやれる。	**.645**	.416
6) 自分に対して肯定的である。	**.471**	.222
8) もっと自分自身を尊敬できるようになりたい。	-.222	.049
3) 敗北者だと思うことがよくある。	**-.593**	.351
5) 自分には、自慢できるところがあまりない。	**-.666**	.443
9) 自分は全くだめな人間だと思うことがある。	**-.734**	.540
10) 何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う。	**-.793**	.630
寄与	4.207	4.207
寄与率（%）	42.1	

→　「自尊心」尺度（α＝.85）